

臨床経過で診る ぶどう膜炎・網膜炎・強膜炎アトラス

後藤 浩 執筆 臼井 嘉彦, 坪田 欣也 執筆協力

「これほど重症なぶどう膜炎が、こんなにも奇麗に治るのか！」

まずは、このアトラスから感じた強い感想である。「しかし、そのためには、これほどの長い闘いがあるのか……」。

その後に、感じた感想である。

「ぶどう膜炎・網膜炎・強膜炎」これらの疾患は難しい。診断も治療も難しい。世には典型例の写真が記載された教科書はたくさんある。しかし、実際にはそれだけでは、診断も治療もできない。実際の臨床現場では、典型所見を示してやってくることはむしろまれである。

このアトラスで、サルコイドーシス、Vogt-小柳-原田病をはじめ、種々の症例の経過を追っていくと、後藤浩氏および執筆協力者（臼井嘉彦氏・坪田欣也氏）の目が見てきた変化をそのまま感じることができる。ぶどう膜炎の治療は、長い長い道のりだということもわかる。硝子体網膜リンパ腫の症例では、初診から12年後までの写真が掲載されている。もはや物語である。診断の決め手となった検査項目や経過の各時点で必要であったステロイドやTNF- α 阻害薬の使い方も付記されており、治療の苦勞を感じるとともに、その疾患の持つ時間的特性を大きなイメージとしてとらえることができる。

後藤氏曰く、

「然るべき時期に的確に診断し治療を行えば、予後良好である」(p.94：梅毒性ぶどう膜炎)。

「時期を逃さず正しく診断し、適切な治療を行うことが予後に大きく依存する」(p.118：後天眼トキソプラズマ症)

「トキソプラズマ症の重症例を、ステロイド単独による治療で悪化させている場合が多い！」(p.121：後天眼トキソプラズマ症)

「診断の確定が遅れたことにより、視機能の回復を得ることができない」(p.147：硝子体網膜リンパ腫)

まずは、書店で手に取って、p.93, p.117, p.121, p.145 の写真を診ていただきたい。これらの所見を正しく診断できているだろうか。p.87 の写真を見て、インフルエンザワクチンによる網膜血管炎を疑うことができるだろうか。昨今、ワクチン多用により、同様の所見に遭遇することも決してまれではない。私自身は、「もしかしたらこれまでに、治るものを治せなくしているかもしれない！」と不安がこみ上げた。ともかく、このアトラスを目に焼き付けることから始めようと思う。

症例の中には、闘って、闘って、ようやく消炎した後に光覚(－)の症例もある。後藤氏のため息が聞こえてきそうな気がした。紹介元の医師は、紹介時の所見と闘い最終後の所見しかわからない。このアトラスでは、その間の闘いのドラマを見ることができる。また、実際にぶどう膜炎・網膜炎の治療に携わっている医師にとっては、自症例のドラマの展開と比較検討し、修正することも可能であろう。

本アトラス掲載の疾患群は、「手元の点眼では治らない」、「角結膜疾患と違って手が届かない」、「時には進行が早く、不可逆性の網膜・視神経障害を来す可能性がある」、「全身にかかわる可能性がある」疾患である。

後藤氏は41年間、おそらく日本で最も多く、これらの難症例疾患の診療に携わってきた。計り知れない苦勞、並ぶべくものもない多くの経験が生み出す声が、このアトラスの写真に盛り込まれている。

全身全霊をかけて、難治なぶどう膜炎・網膜炎と闘ってきた真のプロフェッショナルが、後世に伝えた心叫びを聞いてほしい。

関西医科大学眼膜センター長
佐々木 香る

A4・頁192 2024年04月
定価：13,200円（本体12,000円＋税10%）
[ISBN978-4-260-05350-1] 医学書院刊